〔三〕皇學館大学に勤めて得たもの

田中卓博士と伊勢青々塾

昭和四十一年（1996）春、私（満24歳）は、名大の修士課程を卒え、伊勢の皇學館大学文学部へ国史学科の助手として赴任した。それは専ら田中卓（たかし）教授の御推輓による。

田中先生（大正12年12月12日生まれ）は、戦時中、大阪の浪速高校から東大に進み、平泉澄博士に師事された。しかも、博士が独力で建て有志の学生たちを指導しておられた青々塾に入り、前述の稲川誠一氏等と寝食を共にしながら切磋琢磨されたという。

戦後は、郷里大阪へ帰って教職に就き、大阪社会福祉事業短期大学に勤めながら、日本の古代（大和時代）・上代（飛鳥・奈良・平安時代）史の研究で次々と業績をあげられた。

ついで、昭和三十七年四月に再興された皇學館大学へ教授として赴任。その四年後、大学院増設と共に助手を置き、幸い私を採用して下さった。しかも、田中博士は恩師の志を継ぎ、御宅の近くに自費を投じて伊勢青々塾を作られた。そのため私も入塾して、男子学生数名と起居を共にする、という得がたい経験をさせてもらった。

沖縄とソロモンの慰霊巡礼

その助手一年目には、戦後ＧＨＱの圧力で廃止された紀元節の二月十一日が「建国記念の日」という名称で「国民の祝日」に加えられた。それが可能になったのは、長らく日本国家の成立史研究に心血を注いでこられた田中博士の貢献が極めて大きい。

ついで二年目の昭和四十二年八月中旬、親友と共に沖縄へ出かけた。沖縄は当時まだ米国の施政権下にあったが、私は父が戦死した南洋に一歩でも近づきたかったからである。

炎天下、数日かけて伊江島と本島の主要な戦跡を巡った。その際、非常なショックを受けたのは、摩文仁（まぶに）の洞窟などに戦没者の遺骨も遺品も散乱していたことである。

さらに、その五年後（昭和47年）、亡父の享年と同じ満三十歳の節目に、ソロモンの戦跡を訪ねた。当時まだ英国の統治下にあったが、数年前に現地へ渡り酋長の孫娘と結婚されていた佐藤行雄氏（34歳）のおかげで、父の属していた二二九連隊十二中隊の玉砕地ムンダのジャングル（清水台）にまで入ることができた。

しかも、先を行く素足の現地人（マロニー・ミルトン）が拾いあげた日本兵の飯盒（内蓋）を擦（こす）ってみたら、何と「所」と刻まれていた。さらに翌朝、その辺を探したところ遺骨の破片も出てきたが、ふと気付けば七月二十七日、父の命日であった。

伊勢斎宮への関心と伴侶の研究

少し前後するが、皇學館大学に着任して早々、久保田収文学部長から神道史学会の大会で研究発表するよう言われ、困り果てた。しかし、修論で作った令制国司の補任表をみると、伊勢の国守で斎宮寮頭を兼任する例が少なくない。そこで、せっかく伊勢に来たのだから、斎宮の研究もしてみたいと思い、「斎宮寮の機能と構成」という題の未熟な口頭発表をした。

このテーマは面白いが、それよりも卒論・修論を調べ直して雑誌に出すため、当分棚上げにした。それから三年後、法制史学会の近畿部会で修論の一部を発表するため上洛した際、京都女子大学の史学研究室に勤めていた女性と偶然？　出会った。村井康彦教授の指導で、平安宮廷社会の「所」について修論を書いていた彼女とは、一目で意気投合してしまい、僅か半年後に田中先生ご夫妻の媒酌で結婚した。

その際、斎王は皇女か女王だから、むしろ連れ合い（京子）に任せるほうがよいと考えた。それ以来、主婦業の傍ら矻々（こつこつ）と研究を続け、学位論文『斎王和歌文学の史的研究』等まで仕上げたのは、身内ながらよく努力したと思う。

神宮の式年遷宮と式内社の調査

伊勢の神宮では、７世紀末の天武・持統両朝以来、二十年という式年ごとに宮遷しする、式年遷宮の制度が守られてきた。戦国時代に百年余り中断したけれども、その第六十回ご遷宮が昭和四十八年（１９７３）十月に行われた。

ご遷宮には、木曽から檜材を伐り出し、内宮と外宮の新殿地に古殿と同形の宮殿を建て、ご神宝も装束もすべて造り替えるため、準備に十年近くを要する。その折々に古式ゆかしい祭儀が営まれる。私は伊勢にいたおかげで、それらを間近に拝見することができた。

その最終年の夏休み、京都女子大学の高取正男教授から推薦を受け、神宮の解説を書きあげた。専門外の私にできることは、正確な史料と先学の研究を平易に紹介する以外ないと考え、写真・図版も数多く盛り込んだのが、新人物往来社刊『伊勢の神宮』である。

これは初歩的な概説書だが、二十年後の平成五年（１９９３）、講談社学術文庫に収録された。もちろん、私は今なお神道の素人に過ぎないが、田中先生のもとで志摩国や美濃国（不破郡・池田郡）の式内社（しきないしゃ）（『延喜式』所載の名社）を調査して報告書を纏めたり、『住吉大社史』『真清田（ますみだ）神社史』などを分担執筆する機会に恵まれた。

卒論指導と国史学科のクラス担任

皇學館大学で講師・助教授を務めた六年間、国史概説・日本社会経済史の講義、上代史料（律令格式・六国史・大鏡など）の講読などを担当した。最初に受講してくれた学生の中に、現在法学部で同僚の川北靖之教授や、今春から皇學館大学の学長となった清水潔教授がいる（二人とも京都産業大学で学位を授与）。

また、最も力を尽くしたのは、卒業論文の指導である。特に当初は、授業中に厳しく特訓するのみならず、締切り近くなると、学生の下宿を廻り徹夜したことも少なくない。後半は次第に甘くなったが、それでも卒論に手を入れて学術誌に載せたものが数名いる。

さらに皇學館では、講師以上の専任教員が毎年十名前後の学生を引き受ける指導教員制と、各学科・学年別に全学生を世話するクラス担任制がある。後者は廻り持ちであったが、私は昭和四十六年春に入学した国史学科十期生のクラス担任を務め、四年間、クラス討論や史蹟見学旅行・大学祭などで苦楽を共にした。その結びつきは極めて強く、数年ごとにクラス会を開いている（昨年八月、熱田会館で私の古稀祝賀会も開いてくれた）。